

氏名	佐久間 千尋
学位の種類	博士（人間文化科学）
学位記番号	甲第人12号
学位授与年月日	2014（平成26）年3月14日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第3条第3項第1号
学位論文題目	Narrative Structures and Spaces in the English Romantic Novel: An Intertextual Study of Mary Shelley, Charles Maturin and the Brontës （イギリス・ロマン主義小説における語りの構造と空間：メアリー・シェリー、チャールズ・マチュリン及びブロンテ姉妹におけるテキスト相関性の研究）
論文審査委員	主査 教授 原 英一 副査 教授 原田 範行 副査 教授 Kleitz, Dorsey 副査 名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授 松岡 光治

## 内容の要旨および審査の結果の要旨

### I. 論文内容の要旨

本論文は、19世紀前半のロマン主義時代のイギリス小説が相互に関連しあって一つの潮流を形成し、ブロンテ姉妹（Charlotte Brontë、Emily Brontë、Anne Brontë）の作品に至ることを示し、その潮流の推進に作用する文化的力学を間テキスト性 *intertextuality* の概念によって解明する試みである。ブロンテ姉妹の小説は、イギリス・ロマン主義小説 *the English Romantic Novel* に含まれ、しばしばゴシック小説 *the Gothic Novel* にも分類されるが、それらサブジャンルとの関連性は明確には裏付けられてこなかった。本論文では、「語りの構造」と「空間の表象」の分析を通じて、彼女たちの小説と先行するロマン主義小説とが深いレベルで関連していることを解明する。さらに、そのあまりの特異性のゆえに、文学史上に類例のない孤立した作品として

しば考えられてきたエミリ・ブロンテの *Wuthering Heights* (1847)が、ロマン主義小説の大きな潮流に確固として根付いたものであることを証明する。

この論考の中心となるのは Mary Shelley の *Frankenstein* (1818)と Charles Maturin の *Melmoth the Wanderer* (1820)である。Horace Walpole に発するゴシック小説の系譜の最後に位置するシェリーとマチュリンの作品は、「語りの構造」と「空間の表象」という観点で再検討すると、ブロンテ姉妹の小説に根源的なレベルでつながる要素を含んでいることが判明する。ブロンテ一家がアイルランドの出身であること、マチュリンがアイルランドの作家であること、ロシアの作家 Aleksandr Pushkin がマチュリンに大きく影響されていたこと、エミリがドイツ語訳を通じてプーシキンに接していた可能性があることを考慮すると、アイルランド、イングランド、ドイツ、ロシアという広大な地理的・文化的文脈がブロンテ姉妹の小説の背景として浮かび上がる。本論文は膨大な先行研究のあるブロンテ姉妹研究に新たな局面を切り開くものである。

## II. 審査の結果の要旨

### 1. 論文の構成

本論文は6章から構成される。イントロダクションにおいて、「語りの構造」と「空間の表象」について、Gérard Genette の物語論を援用して、定義づけを行った後、以下のように議論を展開する。

第1章においては、全体の議論の出発点として、シェリーの『フランケンスタイン』を取り上げる。語りの構造と空間の表象の観点からこの小説を分析することで、後世の作品との関連性を見出すことを目的としている。『フランケンスタイン』の語りは、ヴィクター・フランケンスタインの話を聞いたウォルトンが、姉にその内容を書き送った手紙、という二重構造が基本となっているが、この二重構造はさらに一層を加えた三重構造へと掘り下げられる。この小説に「放浪」wandering のモチーフが見られることも注目すべきである。このモチーフはシェリーの父 William Godwin の小説 *Caleb Williams* (1794) 及び James Hogg, *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner* (1824) おいて、「追う者」と「追われる者」との関係に表現されている。

本章の議論により、『フランケンスタイン』のモンスターが、放浪、復讐というモチーフと語りや空間の表象の相似性を通して、その形姿を異にしつつも、同時代の小説に

偏在していたことが明らかにされる。これは先行研究には見られない独創的な成果である。

第2章では、第1章の議論を踏まえて、具体的な表象として「北極海」、「月」、「鏡」、の3つを挙げて、『フランケンスタイン』とブロンテの小説との関連性を解き明かす。シェリーの小説に登場する「北極海」は、Charlotte Brontëの *Jane Eyre* 冒頭にも言及されている。「月」は『フランケンスタイン』で決定的に重要な場面で繰り返し現れる。フランケンスタインとモンスターを常に見守り続ける「月」は「全知の語り手」omniscient narratorの視点を提供している可能性があり、さらには「語りの境界」としても機能していると考えられる。「鏡」を見て自らの姿を知るというアイデンティティ構築あるいは崩壊のモチーフは『フランケンスタイン』のモンスター、ジェイン・エア、『嵐が丘』のキャサリンを通して論じられる。

本章は、ジュネットの物語論を基盤としつつ、これまで単にメタファーとして考えられてきた「北極海」、「月」、「鏡」を「語り」の側面から捉える可能性を提示した。

第3章では、アン・ブロンテの *The Tenant of Wildfell Hall* (1848) とエミリー・ブロンテの *Wuthering Heights* (1847) を、語りの構造と空間との関連性の観点から比較考察する。二作品の共通要素は書簡を用いた語りの二重構造である。この構造を分析すると、そこでは「窓」が二重の「語りの敷居」 narrative threshold として機能していることが明らかになる。その結果、窓は物質的な道具ではなく、登場人物によって開閉されるプロットの装置と捉えることが可能となる。『嵐が丘』においても、「窓」は同様の機能を担っている。

本章での議論は、ブロンテ姉妹の小説における「窓」のモチーフが、メタファーであることを超越して、「語りの装置」となっていることを論証したものとして、きわめてユニークである。大胆かつ斬新な論述であるが、精密なテキスト分析に支えられて、強い説得力を持っている。

第4章では、『ジェイン・エア』における語りの二重構造と、語りの中での窓と月の役割を、ジェインの人生における旅と絡めて考察する。ジェインは叔母の家を出てから居住地を転々するが、これは彼女の成長における旅であり放浪である。『ジェイン・エア』は一人称の語りであるため、一見して、二重構造には見えないのだが、実は語り手としてのジェインは、ジェイン・ロチェスターとしてジェイン・エアの過去を語っているのであり、これを二重の語りとして捉えることができる。この語りの二重構造は「窓」と

「月」の表象の分析を行うことによって明らかになる。「月」は全知の語り手の表象であり、焼け落ちた Thornfield Hall の「ガラスのない窓」は、語りが終息するとき、空間もそれに呼応することを示すのである。

本章では、前章での議論を踏まえ、「窓」と「月」の表象をメタファーとしてではなく、「語りの装置」として捉えることにより、『ジェイン・エア』の語りの特質を解明するという成果をあげている。

第 5 章では、『嵐が丘』の主人公 Heathcliff と『放浪者メルモス』の比較を通して、語りの構造と空間の議論をより深く、広く展開する。「恐ろしい人間の姿をした悪魔」とされるヒースクリフはメルモスの「生まれ変わり」であるとの仮説を立て、これを立証している。両作品を結びつける先行研究はこれまでほとんど存在していない。本章では、放浪者メルモスとヒースクリフの類似性、両作品の語りの入れ子式構造、そしてブロンテとマチュリンがアイリッシュであるという共通の出自にさかのぼり、検証した。その結果、『嵐が丘』はゴシック小説の系譜に位置づけられるのみならず、『放浪者メルモス』を継承した小説とみなしうると結論づける。

本章は二つの作品の詳細な物語論的分析によって、ヒースクリフという特異なキャラクターの文学的出自を解明するという重要な学術的成果を導いている。

第 6 章では、『放浪者メルモス』、プーシキンの『エフゲーニー・オネーギン』、そして『嵐が丘』の影響関係あるいは間テクスト的关系を論じる。言語としてはもちろん地理的にも遠く隔たっているかに見えるプーシキンの作品はイギリス文学から多大な影響を受けていた。実際、『オネーギン』には 2 か所でメルモスが言及される。本章ではエミリ・ブロンテが『オネーギン』に接した可能性について徹底したリサーチが行われている。決定的な証拠は発見できなかったが、エミリがドイツ語訳を通して『オネーギン』を読んだ可能性がつきとめられた。より重要なことは、これら三作品のヒーローに共通する「放浪者」としての特性であり、そのモチーフの背後に、エミリが影響を受けた George Gordon Lord Byron や Wilhelm Goethe、Walter Scott が存在することである。マチュリンとプーシキンが造形したヒーローが最終的に結晶化したのが、ヒースクリフなのである。

本章で得られた重要な知見は、ブロンテ姉妹の作品に至るロマン主義小説の潮流が、アイルランド、イングランド、ドイツ、ロシアに跨がるものであることを精密なリサーチとテクスト分析によって証明したことである。

## 2. 論文の特徴

本論文は一般的にゴシック小説の変種と言われることが多いブロンテ姉妹の小説について、その文学史的な位置づけに厳密な検証を行い、英語圏にとどまらない広範囲なテクストの照応関係の検討によって、新たな研究の可能性を提示したものである。ゴシック小説群に用いられている語りの装置としての空間は『ジェイン・エア』、『嵐が丘』、『ワイルドフェル・ホール』に受け継がれ、さらには彼女たちによって独自の発展を遂げたことが証明されている。『嵐が丘』は、エミリの厭世的性格と伝記的事実の乏しさゆえに、イギリス文学の中でも突出した特異性を持つ、孤立した作品と見做されていた。しかし、この作品こそ、実は同時代の文学風土に最も深く根ざし、そこから生み出されたものであることを、語りの構造と空間の表象からの分析によって証明したこと、そのリサーチの過程でプーシキンの『オネーギン』との関係にまで議論が及んだことはきわめてユニークな特徴である。プーシキンとブロンテを結びつける媒体となった『放浪者メルモス』は、(異論もあるが)一般的には最後のゴシック小説とされており、先行する『フランケンスタイン』、『ケイレブ・ウィリアムズ』等のテーマを色濃く反映している。その潮流はジャンルの消長を越えて続き、それが行き着いた地点が『嵐が丘』なのである。本論文は、「語りの構造」と「空間の表象」の議論によって、ブロンテ姉妹の小説がアイルランド、イングランド、ドイツ、ロシアに及ぶ広大な文脈のなかに位置づけられることを論証し、この領域の今後の研究に新たな展望を切り開いたものである。

## 3. 論文の評価

ゴシック小説とロマン主義小説の中に含まれるブロンテ姉妹の小説との関連は、あたかも自明のことであるかに言われながらも、これまで明確には検討されることはほとんどなかった。本論文では、「語りの構造」と「空間の表象」の分析という斬新な手法により、彼女たちの小説と先行するロマン主義小説とが深いレベルの関連性を有していることを明らかにしている。その研究の結果、文学史上の孤峰とされるエミリー・ブロンテの『嵐が丘』が、ロマン主義小説の大きな潮流に胚胎して生まれたものであることをきわめて説得力ある議論によって裏づけた。『フランケンスタイン』と『放浪者メルモス』に起源を持つ放浪者のモチーフを追求して、プーシキンの『オネーギン』と『嵐が丘』の相似性に突き当たり、徹底的なリサーチによって、アイルランドからロシアに至る、文学的潮流の存在を浮かび上がらせるという成果をあげている。本論文はロマン

主義小説の研究に新たな可能性を切り開いたものと評価できる。

以上により、本論文は課程博士の学位認定の水準に十分に達しているとみなされる。

#### 4. 最終試験の概要

2月9日（日）午後2時から3時半まで、公開形式で申請者による論文の概要・意義についての発表が行なわれ、審査委員および出席した教員、学生からの質疑、応答がなされた。その後別室に移動し、午後3時45分より、審査委員（学外審査委員1名を含めて4名）により、論文の全体および細部について、詳細な質疑応答が行なわれた。その結果、審査委員全員の一致により、論文内容について合格と認定された。

外国語（フランス語）については、2月9日（日）午前11時から正午に筆答試験が行なわれた。その結果、外国語についても十分な学力があると判断された。

以上を総合して、最終試験の判定を合格とした。